

リフレクシヴ・プロジェクト：A. W. グールドナー再考

宮 原 浩 二 郎

一 はじめに —グールドナー評価の問題点

現代のアメリカ社会学の生んだ特異な知性のひとりにアルヴィン・グールドナーがいる。1950年代に組織論者・産業社会学者として登場したグールドナーは、60年代には機能主義理論の革新をリードし、70年代初頭には社会学の危機をめぐる活発な論争を巻き起こした。さらに、70年代後半からはマルキシズム研究や知識人論で独自の「批判理論」を展開した。グールドナーの仕事については、いわゆるラディカル社会学運動での役割をはじめとして、すでに多くの論評や批判がなされてきている。しかし、広汎な領域にわたるグールドナーの仕事の全貌を踏まえた上での考察は十分なされてきたとはいえない。社会学者グールドナーの「全体像」はいまだに曖昧であり、現代社会学における位置づけも十分にあきらかにされてきたとはいえない¹⁾。

これまでのグールドナー評価の問題点は少なくとも三つあると思われる。第一に、全体像が明確にされず、しばしば分裂したイメージが放置されてきたことである。たとえば、初期の官僚制研究は産業（組織）社会学で、中期の互酬性と機能的自律性に関する考察は機能主義理論の文脈で、さ

らに後期の知識人論やマルキシズム研究は批判社会学との関連で注目されたが、これらの研究活動に一定のまとまりを与える一貫した問題意識が何であったのかについてはあまり取り上げられていない。組織論者、新機能主義者、ラディカル社会学者、知識社会学者など断片的な印象はあっても、彼が全体として何を追及したのかが今一歩はっきりしていない。グールドナー自身の研究関心の変化も大きいので、ある程度のイメージの分裂は当然ともいえるが、それにしても彼の多彩な業績の全体を貫く根本的な問題機制に光をあてる必要があるであろう。

もっとも、グールドナー像が分裂しているといっても、さきにあげた個々のイメージが同等の比重をもっているわけではない。一般的には、グールドナーは『西欧社会学に迫り来る危機』（1970）を書いてパーソンズを批判し、「自己反省の社会学」を提唱したラディカル社会学者として理解されている²⁾。事実、彼は『危機』出版当時、アメリカの「ラディカル社会学の指導者であるばかりか、カリマス性を付与された予言者と目され」ていた³⁾。「ラディカル社会学運動」といえば、コルファックス、ジャマンスキー、ホロヴィッツ、ツァイトリンなどの名前が連想されるが、グールドナーはその理論面でのリーダー格として、新たなパラダイムの構築をめざした理論家として一部

1) グールドナー社会学を全体としてとりあげた論稿は、『理論と社会』誌でのグールドナー追悼論文集 (*Theory and Society* 11(6), 1982) がある。なかでも以下の論稿が重要である。Charles Lemert and Paul Piccone, "Gouldner's Theoretical Method and Reflexive Sociology". Martin Jay, "For Gouldner: Reflections on an Outlaw Marxist". Cornelis Disco, "The Educated Minotaur: The Sources of Gouldner's New Class Theory." その他, John Sewart, "Is Critical Sociology Possible?: Alvin Gouldner and the 'Dark Side of the Dialectic'", *Sociological Inquiry* 54(3), 1984; Ellsworth R. Fuhrman, "Alvin Gouldner and the Sociology of Knowledge: Three Significant Paradigm Shift," *Sociological Quarterly* 25(Summer), 1984; John Alt, "Alvin W. Gouldner", Telos, 1981(Spring) がグールドナーの全体像に焦点を合わせている。

2) *The Coming Crisis of Western Sociology*, New York, Basic Books, 1970 (岡田・田中他訳『社会学の再生を求めて』(全3冊), 新曜社, 1974-75)。以下、『危機』と略記。

3) 高橋徹「ラディカル社会学運動」, 『思想』1973年5月。

で高く評価されたのである。この場合、いわゆる〈自己反省の社会学 (Reflexive Sociology)〉が彼の代名詞のようになっており、それを中心としたかなり鮮明なグールドナー像が存在したともいえる。以下に検討するように、〈リフレクシヴィティー〉はたしかにグールドナー社会学のキー・コンセプトだから、こうした評価(擁護であれ、批判であれ)がグールドナーの全体像を一定程度捉えていることはいうまでもない。

しかし、問題は〈リフレクシヴ・ソシオロジー〉の理解の仕方であり、ここにグールドナー評価をめぐる第二の問題点がある。彼の〈リフレクシヴ・ソシオロジー〉は、一時はパーソンズ機能主義(と正統マルキシズム)にとってかわる新たなラディカル・パラダイムの構築へむけての布石として一部で歓迎された。とはいえ、一般的には、政治的なイデオロギー批判や社会学者の道徳的な〈自己反省〉と同一視され、「情念過剰気味の」政治的、外在的な現状告発にすぎないとして批判されてきた。当初からラディカル社会学に共感をもたなかった側からすれば、グールドナーの議論は傾聴すべき感情の表出であっても科学的な理論ではない。また、「社会学」ではなくて「社会」の変革を強調するラディカル派からみれば、社会学の「自己反省」など生ぬるい主観主義にすぎない。さらに、ロマン主義への自己懂着的な加担を指摘し、グールドナー理論の非建設性を批判する向きもある⁴⁾。

だが、グールドナーのいう〈リフレクシヴィティー〉は、「アカデミック社会学の保守的偏向の〈自己反省〉」には還元できない、社会認識におけるより原理的な問題に対する問いが含まれていたことが十分に評価される必要があるのではないだろうか。〈リフレクシヴィティー〉の問題とは、思考についての思考、理論についての理論の可能性の問題であり、社会学の文脈でいえば、〈社会学理論の自己回帰性〉の問題である。それは、理論をそれ自身に自己適用することであるが、その含みは

理論の自足性の装いの否定であり、理論の自己完結性の破壊である。グールドナーのプロジェクトは知識の存在拘束性に関するマンハイムの発想の徹底化の試みであり、単なる道徳的な〈自己反省〉や政治的なイデオロギー批判とは次元の異なる試みだったはずである。

確かに、このプロジェクトは必ずしも成功したとはいえない。少なくとも今日の社会学理論の新たな展開にむけて積極的な貢献をもたらすことができなかった。後に詳述するように、グールドナーのアプローチは結局のところ「自己言及のパラドクス」に落ち込んでしまい、社会認識の新たな地平を切り拓くにはネガティブに過ぎた。しかし、だからといって彼の仕事が無意味になるわけではない。彼は自分の試みが「手を自分の首に巻き、どれほど締めることができのるか確かめ」ようとするような不条理なものであることを熟知していた⁵⁾。グールドナーの自己回帰性のプロジェクトは近代理性に深くコミットすることによって、かえってその矛盾の中に巻き込まれ、「自己否定の不可能性」を壮大なスケールで示した希有なケースであるといえる。それは少なくとも今後の社会学理論の展開において考慮しなければならない貴重な道しるべとしての意義をもっているといえよう。

ところで、リフレクシヴ・プロジェクトの意味(さらにはその失敗の意味)を掴むには、『危機』やラディカル社会学運動のみに限定せずに、グールドナーの仕事の全体、とくに70年代後半に書かれた著作に注目する必要がある。だが、グールドナーへの関心がラディカル社会学の動向と過度に一体化されてしまったため、後期の著作は『危機』の陰に隠れてしまった面がある。実際、従来のグールドナー評価は『危機』とその直後のラディカル社会学関連の発言、あるいはせいぜい論文集『社会学のために』(1973)までの著作に依拠したものがほとんどであろう。『危機』以降の主要著作が十分に検討されていないというのが、グールド

4) たとえば、『危機』をめぐる American Sociological Review 78(1), 1972の特集や『現代社会学』第6巻1号(1979年)での誌上討論会などを参照。

5) とくに日本では、後期著作の一部について、以下のような翻訳・紹介があるのみである。A. W. グールドナー(永井務訳)「革命的知識人論序章(上下)」『思想』1977年3月、4月。同(原田達朗)『知の資本論—知識人の未来と新しい階級』新曜社、1988。矢沢修次郎「アメリカ社会学における理性の諸問題」、『現代思想』1983年1月。同「リフレクシヴ・ソシオロジーの可能性」(見田・宮島編『文化と現代社会』東京大学出版会、1987所収)。柳原桂

ナー評価の第三の問題点である⁵⁾。

以下では、これら三つの問題に焦点をあてながら、グールドナーの主要な論文・著作をその発表時期に沿いつつ、作品内在的に検討してゆくことで、自己回帰性のプロジェクトの意味を明らかにし、グールドナー像の再検討を試みたいと思う。

二 初期の組織研究と機能主義批判

グールドナーの出世作となったのは『産業における官僚制』(1954)である⁶⁾。よく知られているように、この研究は石膏会社へのフィールド調査を基にした、組織の官僚制化の研究である。事業所長の交代をきっかけとして、以前の「温容型」労使関係が崩れ、規則の遵守を徹底化するウェーバー的な官僚組織化がすすみ、労働者による抵抗をひきおこすが、このことがさらに徹底した規則主義と経営側による厳しい監督を惹起し、ついには山猫ストに至るプロセスを克明に捉えている。『官僚制』は組織研究の古典として様々な角度から検討されてきたが、本稿の課題からすると、このきわめてオーソドクスな初期の研究の中にその後のグールドナーの軌跡を予感させるものがあることが注目される。一つはこの作品の狙いが、構造—機能主義的なウェーバー受容における「官僚制化の必然性」の命題を批判することにあった点である。彼は組織の官僚制化のプロセスそのものを重視し、そこに組織内集団（経営者層、中間管理者層、労働者）のあいだに複雑な緊張関係があることをつきとめ、諸集団間の力関係が組織変動に与える影響に注目した。それは、多分に素朴な

(集団行為者の)主体性論を伴いながらも、その後の客観主義的社会理論の批判へとつながってゆく。もう一つは、有名な「官僚制のパターン」の定式化(懲罰的、代表的、模範的)と、その中で専門家=知識人の役割の強調である。「懲罰型官僚制」では、規則(たとえば欠勤取締り規則)の正当性は究極的には規則設定者の地位の合法性に基づくが、「代表官僚制」では、規則(たとえば安全規則)の正当性は専門知識と下位者の同意に基づくとされる。そして、前者の担い手がラインの「本来の官僚(true bureaucrat)」であり、後者の担い手がスタッフの「専門家(expert)」である。グールドナーは、「専門家」が「官僚」に服従している現実を踏まえ、「専門家」を中心としたより民主的な「代表官僚制」の可能性を追求すべきことを説いている。この点は従来あまり注目されてこなかったが、専門家=知識人の役割に対する強い関心がすでに『官僚制』において示されていることは重要である⁷⁾。

初期グールドナーの官僚制研究の背後にある問題意識を最も直截に示しているのは「形而上的パトスと官僚制の理論」(1955)である⁸⁾。ここでグールドナーは『官僚制』での知見を裏付けとして、当時ウェーバーやミヘルスを援用して広く受け入れられていた「官僚制化の必然性」のテーゼが、社会主義に幻滅したアメリカ知識人に共有された宿命論的な悲観主義のパトスによって支持されており、必ずしも経験的な調査研究による検証によって支持されていたわけではないことを鋭く指摘した。このボレミックの方法は、「必然性」論の支持者の多くが実証主義的科学方法論に従って

子「自己反省の社会学—A. グールドナーの道化劇」(新睦人・三沢謙一編『現代アメリカの社会学理論』恒星社厚生閣, 1988)。

6) *Patterns of Industrial Bureaucracy*, Glencoe, The Free Press, 1954 (塩原勉他訳『産業における官僚制』、ダイヤモンド社, 1960)。以下、『官僚制』と略記。これはグールドナーのコロンビア大学における学位論文であり、指導教官のマートンから強く影響をうけている。ちなみに、学位審査者のなかにはP. ラザースフェルトやS. M. リブセットがいた。

7) 『官僚制』の姉妹編として *Wildcat Strike*, Yellow Springs, Antioch Press, 1954があり、官僚制の理論をまとめたものとして“Organizational Analysis” in R. K. Merton et al(ed.), *Sociology Today*, New York, Basic Books, 1960がある。ちなみに、*Sociology Today* への寄稿者は、T. パーソンズをはじめR. K. マートン、P. ラザースフェルト、S. M. リブセット、P. セルズニック、A. インケルス、K. デーヴィスなど当時の機能主義社会学を代表する気鋭の社会学者で固められていた。当時のグールドナーが組織分野を代表する堅実な「中範囲の理論家」としてアメリカ社会学会の主流にあったことがわかる。

8) “Metaphysical Pathos and the Theory of Bureaucracy,” *American Political Science Review*, 1955(June). この論文がグールドナー社会学のその後の展開を予告していることはRod Aya, “The Theory Behind Theory and Society”, *Theory and Society* 11(6), 1982に力説されている。

いたことに目をつけて、その自己矛盾を衝くものであった。そして、このことは理論(的命題)のもつ盲点の認識に結び付く。つまり、高度に定式化された社会理論はその背後に感情的な「下部構造」をもち、それ自身からは見えない死角がある、という認識である。その意味で、「形而上的パトス」は彼の自己回帰性プロジェクトの出発点を素朴な形で示すものであった⁹⁾。

リフレクシヴ・クリティークの方法は、少し後の「アンチ・ミノター：価値自由社会学という神話」と題した論文でより明確になる¹⁰⁾。ここでグールドナーは、周知のウェーバー方法論の援用が科学的客観性の名目のもとに道徳的無関心を正当化していると批判し、「価値自由」信奉のもつイデオロギー的性格を暴こうとする。その際、彼のとった方法は、社会学者という職業集団が「価値自由」を信奉しているという事実を、ちょうど社会学者が他の職業集団の信念体系を分析するように分析するという方法であった。つまり、社会学者がタクシーの運転手、医者、看護婦、炭坑夫、企業経営者といった人々の職業的信念を説明する仕方、社会学者自身の信念を説明したらどうなるか、いいかえれば、社会学者が他人をみるように自分をみたらどうなるか、という発想である。社会学は通常様々な職業集団のもつ顕在的な信念体系を顔面通りには受け取らず、これら集団がそれ自身では認識していないかも知れない潜在的な利害関心や感情複合をつきとめようとする。「価値自由」の信奉も社会学者という特定の職業集団の文化の一要素とみれる限りにおいて、その背後にある利害や感情が問われるわけである。そうしてみると、「価値自由」信奉は社会学を自律した専門職業＝プロフェッションとして確立させようとする利害関心に支えられた、社会学者の職業文化、職業イデオロギーとしての性格をもっていることがわかる。グールドナーにとっては、「価値自由」方法論の論理内在的な検討は二次的な課題で

あり、むしろその現実の実践が問題とされる。科学方法論それ自体ではなく、社会的な実践としての方法論が問題とされており、「自己回帰性」の原理はこうした文脈ですぐれた批判の武器となっていたのである。

ところで、初期グールドナーといえば「機能主義理論における互酬性と自律性」(1959)及び「互酬性の規範」(1960)を発表した、革新的な機能主義理論家としてのグールドナーを想起する人も多いだろう¹¹⁾。実際、当時のグールドナーは、パーソンズ流の「全体」志向に対して、「部分」に焦点をあてるマートンの機能主義をさらに展開しようとしていた。それは、システム変動の原理を内に含んだ機能主義への志向であり、ここから周知の「部分の機能的自律性」や「システム緊張」の考え方が提唱される。パーソンズは「部分の相互依存による均衡」を強調するが、問題は諸部分がそれぞれ異なる度合の機能的自律性をもち、システムの均衡の度合(システムネス)が様々でありうることである。また、パーソンズでは価値の共有によるシステム統合の他に、諸部分のあいだの交換の互酬性による統合が暗黙の前提とされているが、これも相互的な等価交換から一方的な不等価交換まで多様な形態をとることができ、「搾取」の問題なども含めてシステム緊張の程度を規定する。彼は、機能主義的分析はこのような発想の転換なしにはシステム変動(維持)に対して各部分が行使する因果的影響力の大きさを比較することができず、結局社会の動態を捉えることができない、と主張した。

グールドナーの機能主義批判の着眼点は、「部分の相互依存」や「体系」というなかば属性化された概念を「相互依存の程度」や「体系性の程度」というような「変数」として扱おうとするものであった。こうした発想の転換はその単純さにおいて、「アンチ・ミノター」論文での「他者を観察するように自己を観察する」という転換に通じるも

9) その後、グールドナーは「代表官僚制」の担い手としての専門家の役割をめぐるいくつか重要な論文を発表する。たとえば、“Theoretical Requirements of Applied Social Science,” *American Sociological Review* 22(1), 1957. “Cosmopolitans and Locals,” *Administrative Science Quarterly*, 1957 (December) / 1958 (March) など参照。

10) “Anti-Minotaur: The Myth of a Value-Free Sociology”, *Social Problems* 9(3), 1962.

11) “Reciprocity and Autonomy in Functional Theory” in L. Gross(ed.), *Symposium on Sociological Theory*, New York, Harper & Row, 1959. “The Norm of Reciprocity,” *American Sociological Review* 25(2), 1960.

のがある。いずれの場合も、実証主義的な機能主義社会学のもつ基本的仮説の一部が、それ自身に適用されたとき内的な矛盾を露呈することを示そうとするものであった。「機能的自律性」の場合は、パーソンズ自身が強調してきた理念型の視座の多変量分析的視座への転換が、他ならぬパーソンズ社会学の体系概念に自己適用されたのである。「形而上的パトス」にその片鱗をあらわし、「アンチ・ミノター」で自覚化された自己回帰的批判の原理はここでも指摘しうるように思われる¹²⁾。

三 社会学の社会学

グールドナーが社会理論研究に本格的に取り組み始めたのは『プラトンの登場：古典ギリシャと社会理論の起源』(1965)においてである¹³⁾。これは当時のグールドナーの研究関心の拡がりを反映している重要な文献であるが、その中でとくに注目されるのは「対話」(dialectic)、「明識」(awareness)そして「理性」(reason)をめぐる一連の考察である。彼はプラトン(あるいはソクラテス)の「対話」を「精神の闘い」(the contest of minds)と捉える。それは単なる「争論術」(eristic)とは異なり、競争の動機がより良き知の獲得のために昇華され、真理探求の方向に回路づけられた討論である。この区別はハーバースのコミュニケーション行為の理論における「発話内的行為」(コミュニケーション行為)と「発話媒介行為」(戦略的行為)の区別を想起させるが、「理想的ディスコース」への関心が早くからグールドナー独自の視点で提出されていることが注目される。さらに、彼は「対話」を小集団の相互作用という組織的な基盤の上で考察し、理論の革新には理論家同士の間絶えず議論の前提を問い返してゆく対話を許容するような社会組織が必要であ

る、と強調した。この主張は、『危機』における「理論家のコレクティブ」形成の提案や『理論と社会(Theory and Society)』誌の創刊(1974)につながり、さらには理性的な対話の社会的な担い手としての知識人の考察につながってゆく。

次に、「対話」によって得られる知識の質の問題がある。グールドナーは「エピステーメー」と「テクネー」の区別から認識の基本形態を導き出そうとする。「情報(information)」としての知と「明識(awareness)」としての知である。情報としての知識は現象の「分散」を「説明(account)」しえても、認識者の自己に影響を及ぼすことはできない。それに対して、「明識」は認識者の「精神の質」を変換させ、発見された対象が知る人の自己に深く含み込まれてゆくような知である。いうまでもなく、この区別は「自然科学」対「精神科学」、「法則定律」対「個性記述」の区別にほぼ対応している。グールドナーはそれぞれの限界(狭隘さと神秘主義)を指摘することを忘れないが、「明識」としての知により深く共感し、全体として反実証主義的な立場を示しているのはあきらかである。この意味では、『プラトン』において実証主義・経験主義からの離脱がはじめて明確になり、それによって「マートン門下」からの離脱も決定的になったといえよう。『プラトン』の立場から『危機』の立場へはあと一步である。

さらに、「理性(reason)」の問題がある。グールドナーによれば、プラトンの「理性」は「制御(control)」、「統御(mastery)」を含意し、対象を支配(dominate)しようとする衝動と切り離すことができない。たとえば、「理性」の典型的な働きに「分類(classification)」があるが、これは現象の無限の流れに秩序＝命令(order)をあたえて環境をコントロールする営為であるとともに、自己や他者を審判する行為でもある。事実、プラトンの理想国家では、「理性」が「情熱」を統御し、

12) 「機能的自律性」をめぐる一連の考察は、機能主義変動論の新たなパラダイムの構築という機運の中で大きな期待をこめて。グールドナーも、機能主義分析の「層化システム(stratified system)」モデルを提唱し、R. ピーターソンとの共著、*Notes on Technology and Moral Order*, Indianapolis, Bobbs-Merrill, 1962 では社会変動における道徳と技術の重要性の重みづけについて、みずからファクター分析を駆使して新たな分析の方向を模索している。このプロジェクトはそれ以上の展開をみなかったが、このことが機能主義の革新者としてのグールドナーへの失望を招いた面がある。なお、この間の事情については、大村英昭「アメリカ社会学における〈自己省察〉」、人文論集(神戸商科大学)1975年9月および同「二つの社会学」、人文論集(神戸商科大学)、1976年7月が参考になる。

13) *Enter Plato: Classical Greece and the Origins of Social Theory*, New York, Basic Books, 1965.

哲学者(哲人王)が奴隷を支配する。「理性の概念そのものの中に権威主義が内在している」という指摘は、グールドナーが早くから合理的ディスコースへのコミットメントとともにその批判的な対象化を試みていたことを示している。すでに『プラトン』において、「理性的対話を通しての明識の獲得」という啓蒙主義的な理念とともに、理性的対話そのものを社会的な文脈に置いて批判しようとする独自の姿勢がみられることに注目しておきたい。この点は特にハーバースとの異同を見てゆくときに重要である。

『プラトン』は論争書ではなく、ギリシャ思想に社会理論の源流を探求した、内省的な自己学習の記録である¹⁴⁾。これに対して「パルチザンとしての社会学者：社会学と福祉国家」(1968)は、きわめてグールドナーらしい挑発的な論文であり、H. ベッカーによる価値自由方法論の批判の再批判を通して、社会学における「客観性」の問題を再検討している。シカゴ学派の伝統に立つベッカーは、社会学研究に価値から自由な客観性などありえない、と主張した。社会学者は結局誰かの視点に立ってしか意味ある研究をなしえないのであり、そうであるならば自分は逸脱者、「アウトサイダー」、よりの確には「負け犬 (underdog)」の立場に立つと宣言した。グールドナーはベッカーの主張を知識社会学的に分析してみせる。ベッカーは、麻薬常習者、売春婦、浮浪者などの「負け犬」を社会の「犠牲者」とみて、福祉国家による救済・管理の対象とみなすが、それは「負け犬」との感情的な一体化にもかかわらず、実は地方の中級官僚の抵抗を排して福祉国家化をすすめる中央の上級官僚の立場をとっている。つまり、ベッカーのパルチザンシップは教育程度が低く偏見に満ちた「ローカル」な中級管理者を批判するものの、教育程度が高く洗練された管理をめざす「コスモポリタン」な上級管理者にとってはむしろ歓迎すべきもので、結局彼らの立場に与するものだ、というのである。「パルチザン」論文はベッカーを支持するリベラルな改革派のみならず運動

側の一部ラディカル達をも混乱させるものであった。というのも、早くから「価値自由の神話」を批判していたグールドナーが、「負け犬」の立場をとるという「進歩的な」主張を真っ向から批判したからである。「応用社会学」の提唱や「アンチ・ミノター」での主張が、社会科学の介入による社会問題の解決という福祉国家の要請に沿っていた面があることを考えれば、ここにきて彼の福祉国家に対するスタンスが微妙に変化したともいえる。そして、こうした視点は後期の知識人論に受け継がれてゆくことになる¹⁵⁾。

『プラトン』で「理論の理論」の構想に着手し、「パルチザン」で新たな福祉国家状況における社会学批判の視座を確立したグールドナーの次の大作が『危機』である¹⁶⁾。これは大きな反響をもたらした問題提起の書であって、アメリカ社会学雑誌 (American Journal of Sociology) (1971) での論争をはじめとして多くの議論を呼んだ。論争の詳細については、すでに多くの論稿があるので、ここで繰り返すことはしない。ただ、従来この著作はグールドナーのニューレフト・ラディカリズムへの突発的な転向のようにうけとられる傾向があったが、むしろ彼自身の社会学の発展過程の一段階として位置づけうる面が強調されてよいだろう。

『危機』は、「社会理論の社会理論」のための予備的な考察にはじまり、パーソンズの機能主義の批判的検討、西欧社会学 (マルキシズムを含む) の危機の診断を経て、「自己反省の社会学 (Reflexive Sociology)」の提唱に至る四部構成をとっている。まず、すでに「形而上的パトス」で示唆されていた「社会理論の下部構造」論が展開される。「アンチ・ミノター」と同様、グールドナーは「われわれが他人の信条を見るようにしてわれわれ自身の信条を見ること」の必要性を説く。その目的は、「社会学者がなぜある理論を採用し、他の理論を拒否するのか、社会学者がある理論から他の理論へと乗りかえていくのはなぜか」という問題を社会学的に説明することである。通

14) "The Sociologist as Partisan: Sociology and the Welfare State," *American Sociologist* 3(2), 1968.

15) John Alto, 前掲論文参照。

16) *The Coming Crisis of Western Sociology*, New York, Basic Books, 1970 (岡田・田中他訳『社会学の再生を求めて』, 新曜社, 1974-75)。

常、科学方法論のテキストによれば、理論は仮説導出の論理的整合性と経験的証拠による検証によって信憑性をえる、とされている。しかし、社会学は通常社会的行為者が論理と証明にしたがって一定の信条を受け入れるとはみなしておらず、むしろ欲望、利害、感情、伝統といったものにしたがってそうするとみている。社会学者だけが論理と実証にしたがって信じ、他の人々はそうではないとするのはエリート主義的な「方法的二元論」である。また、現実には社会学者は実証主義の方法論に述べられているような仕方であれこれの社会理論を受け入れたり、拒否したりしているわけではない。論理と実証による理論の支持というものは、実際には規範的な言明なのであって、これを理論の信憑性の説明とするのは規範と事実との混同であり、社会理論の社会学的な考察には何ら貢献しない、というのである。

グールドナーによれば、社会理論はそれ自体にとっては死角となっている広大な領域（つまり、自明視され疑い得ないドクサ）を伴っており、この領域にメスをいれるのが「理論の理論」の課題である。明示的に定式化された仮説（通常、「理論」と呼ばれるもの）は、社会理論という氷山の一角にすぎず、その基底には世界の性格に関する原初的で漠然とした信念である「背後仮説」（たとえば、世界は一元的か、多元的か等）やより適用範囲の限定された「領域仮説」（たとえば、社会は安定的か不安定か、人間は合理的か非合理的か等）、さらにはこれらを焦点にして喚起される一定の「感情の構造」が存在する。「背後仮説」「領域仮説」「感情の構造」が理論の「下部構造」を構成する主要素であるが、それは一定の歴史的社會において社会化され、それ自体が社会的産物であるところの理論生産者や受容者のパーソナル・

リアリティーに大きく規定されている。したがって、社会理論は、個人的な体験に浸透され、感情性を負荷されたその「下部構造」が、理論受容者の背後仮説や感情と交響したとき広く信奉され、逆にこれと不協和になるとき失墜する、というのである。説明としての論理的整合性や経験的妥当性は、理論の盛衰の経験的な研究にとっては二次的な問題でしかない、というのが彼の主張であった。

『危機』における周知のパーソンズ批判も、基本的には「理論の理論」ないしは「社会学の社会学」のケース・スタディとして構想されている。グールドナーによれば、パーソンズがパートの自律性を無視し、体系の体系性を変数化して考えなかったのは、単なる論理的なミステイクではなく、狭い意味での「科学的理論」内部の問題ではない。それはむしろパーソンズ理論の深層にある「領域仮説」の表出そのものであるから、そこにメスをいれないと十分に理解できない問題である。この場合、関連する「領域仮説」は、「全体」の「部分」に対する優位と「統合」の「変動」に対する優位である。これらはそれぞれ「社会」の「個人」に対する優位、「調和」の「葛藤」に対する優位の仮説でもある。グールドナーはこれらの領域仮説がさらにパーソンズ理論のもつ「保守的感情構造」（すなわち、何とかしてアメリカ資本主義を正当化したいという感情）と密接に結び付いていることを指摘したのである¹⁷⁾。

『危機』にいうリフレクシヴ・ソシオロジーの狙いとは、世界を分析するように、自己をも分析できる社会学、広い意味での認識の客観性を確保しうる社会学であった¹⁸⁾。実際、ここでのグールドナーの立場は、ニューレフト思想というよりも、認識の客観性が認識者のもつ一定の主体的な

17) グールドナーのパーソンズ批判はかなり複雑な考察となっていることも否めない。たとえば、アメリカ社会学におけるパーソンズ派の優位をハーヴァードの権威と直結させるなど誤解を招きやすい議論が少なくない。実際、彼の論争好きは悪名が高く、彼自身「争論家」を演じたこともしばしばらしい。前掲の *Theory and Society* 誌の追悼論文集にも、「刺がある (spiky)」とか「気にさわる (obnoxious)」といった人物評が異口同音にでている。グールドナーには、ミルズ、ヴェブレンに遡るアメリカ的ラディカル、一種ポピュリスト的な反権威主義の伝統がうけつがれているのかもしれない。彼の「アメリカ人気質」の積極的な評価は M. Jay の前掲論文に、否定的な評価は Goran Therborn, *Science, Class and Society*, New Left Books, 1976, p. 35 にみられる。

18) *Reflexive Sociology* には「自己反省の社会学」、「自己省察社会学」などの訳語があてられてきた。これらは『危機』（とくにエビログ）の文脈からすれば適切であろうが、現在の時点から振り返ってみればグールドナーの立場を過度に道徳化する点で必ずしも最善な訳語ではなかったのではないかと思われる。

態度に支えられるとしたウェーバーの科学論の延長上にあった¹⁹⁾。グールドナーは社会学者がみずからの置かれた社会的な状況や役割を「社会学的に」理解することを要求したが、そのような要求が特定のイデオロギーや政治的立場とは次元を異にする、きわめて論理的な原理に立脚していたこと、そして、彼のいう「ラディカル・ソシオロジー」とはすなわちこうした立脚点をとる社会学にはかならなかったことが強調されてよいだろう。

グールドナーは、『危機』のエピローグで「未完成の橋の先から向こう岸めざして飛べ」と呼びかけた。組織論・産業社会学という専門分野に定住せずに、あえてプラトン思想に沈潜し、社会学理論の全面的な再検討に乗りだしたのは、大きな冒険であったにちがいない。だが、こうした冒険はランダムになされたわけではなく、つねに社会学理論の自己回帰性の追究をめぐるなされてゆく。そして、この探求の方法は以後知識社会的な色合いを濃厚にしつつ、さらに試みられてゆくことになる。

四 マルキシズムのマルキシズム

『危機』出版後のグールドナーは、G. ルカーチの『歴史と階級意識』英訳版への書評論文(1971)を書いて、この本を二十世紀マルキシズムの最高峰を示すものと高く評価し、批判的マルキシズムに深い共感を示した²⁰⁾。この書評は論文集『社会

学のために』(1973)の後半にマルキシズム研究のいくつかの未発表論文とともに収められたが、これらの論稿は文体においても内容においても、マルキシズム的なディスコースに傾斜しており、これをもってグールドナーの(批判的)マルキシズムへの「転向」を示すものと受け取られたほどであった²¹⁾。とはいえ、彼は若いルカーチを手放しで賞賛したわけではない。初期ルカーチの「合理主義的、前官僚主義的な社会主義の概念」に「スターリニズムに対する内的な脆さ」をみだし、また、主体-客体の同一性を強調するヘーゲルのマルキシズムの「人間主義的帝国主義(humanistic imperialism)」の陥せいを指摘している。『危機』以降のグールドナーにマルキシズムの語彙が急増するのは事実であるが、それには研究対象としてのマルキシズムとの同一化の必要も介在していたであろう。相手の議論の中にはいりこんだうえでその内部矛盾を衝こうとするグールドナーの場合、対象が変わるにしたがって視座を転換してゆくのは方法的にも要請されていたからである。事実、彼は同じ時期の論文『二つのマルキシズム』で「マルキシズムそのものをマルキスト的に批判する」試みをあきらかにする²²⁾。このプロジェクトの課題は、第一にマルキシズムを歴史的・社会的所産として把握すること、第二に、マルキシズム理論をそれ自体内的な矛盾をはらむ理論として捉えることである。『危機』以降のグールドナーは、マルキシズムに「転向」したというよりも、「自己回帰の銃を(機能主義から)マルキシ

19) たとえば『危機』邦訳書3巻216頁、同229頁参照。『危機』におけるグールドナーの主張は「ウェーバーの学問論をほぼ完全に踏襲したもの」とし、「グールドナーはまぎれもなくウェーベリアン」であるとする見方がある。大村英昭「非同調の社会学」、人文論集(神戸商科大学)、1974年7月、85頁参照。事実、グールドナーの著作には方法論の他にもウェーバー的な視点が随所にみられる。方法論における、「悪いニュース(bad news)」「敵意ある情報(hostile information)」への感応性としての「客観性」の考え方などは、ウェーバーの「責任倫理」と直結しているのはあきらかだが、後に触れる「理論のポリティカル・エコノミー」の発想もウェーバー独得の「知的財」、「観念的利害」、「社会的閉鎖」などの概念が下敷になっている。マルキシズムに対する批判の視点もウェーバーから多くを吸収していることはいうまでもない。グールドナーがワシントン大学でMax Weber Research Professor of Sociologyの称号を選んだのも、単にウェーバーのセント・ルイス訪問という歴史的事情以上の積極的な理由があったであろう。なお、D. Wrong, "A Note on Marx and Weber in Gouldner's Thought" *Theory and Society* 11(6), 1982を参照。

20) "Comments on History and Class Consciousness", *New York Times Book Review*, 18 July 1971.

21) *For Sociology: Renewal and Critique in Sociology Today*, New York, Basic Books 1973. 村井忠政訳『社会学のために』杉山書店, 1988. たとえば、L. コーザーは、この論文集に、「洗練された機能主義分析家」と「行動主義的ネオマルキシズム」の二人のグールドナーが「何の和解もなく並存している」とみて、グールドナーの「転向」を批判している。L. Coser, "Book Review: For Sociology", *American Journal of Sociology* 80(4), 1975.

22) "The Two Marxisms" in *For Sociology*. なお、「マルキシズムをマルキスト的に説明する」試みはK. コルシュに遡る。

ズムに向け代えた」のである²³⁾。

さらに、70年代中頃のグールドナーは、新たに特殊言語としての理論、「合理的ディスコース」としての理論という視座を導入してくる²⁴⁾。社会言語学、コミュニケーション論、メディア論の成果を摂取しようとする彼の努力は『イデオロギーとテクノロジーの弁証法』(1976)に集約的にあらわれた²⁵⁾。ここで鍵概念として新たに導入されたのが周知の「批判的ディスコースの文化 (the culture of critical discourse)」(しばしば CCD と略記される)である。「批判的ディスコースの文化」とは、言語使用の特定のルールを特権視する文化であるが、そのルールとは神や伝統といった超越的な立脚点を失った「認識論的不安」を背景にして成立した、近代合理性の文法のことである。グールドナーによれば、それは「(i)主張を正当化することに関わるが、(ii)主張や要求の正当化が権威に依拠する形でなされてはならず、(iii)議論にのみとづいて自発的な合意を喚起すべきだ」とするようなルールである²⁶⁾。批判的ディスコースの文化は、歴史的には、印刷技術やメディアの発達によって大きな影響力をもつようになった「書き言葉の文化」の所産である。印刷による出版は対面状況での議論に比べて、より複雑で注意深い議論を大量に流布することを可能にしたが、読み手の匿名性は、対面状況下であれば相手と暗黙のうちに共有されていた議論の前提や問題の定義を言語的に明示することを要求したのである。

「批判的ディスコース」の概念は、一方では、B. パーンスタインの社会言語学における「洗練された言語種 (elaborated linguistic variant)」と「限定された言語種 (restricted linguistic variant)」の区別から示唆をうけている。この区別は発話状況において発話の原理や規則が言語的に明示

されているか否か、にもとづいており、普遍主義的で明示的な言語表現のパターンを示すミドルクラスの子供と同一状況内にいる者同士の間でのみ暗黙に通じるような個別主義的な表現パターンを示す労働者階級の子供との対比を理論化したものである。あきらかに、「批判的ディスコースの文化」は、前者を優位に、後者を劣位に置く。つまり、「批判的ディスコース」においては発話 (speech) 自体のもつ説得力のみが正当化の源泉となりうるのであって、発話者 (speaker) の社会的威信や個人的カリマスへの言及は筋違いになる。ここでは「よき議論のもつ強制なき強制力」のみが支配するのである。

他方、グールドナーのいう「批判的ディスコース」は、当時ハバーマスが展開しつつあったコミュニケーション行為の理論を強く意識している。「理想的発話状況」をハバーマス自身の「公共性の構造転換」の仕事の文脈に置いて理解しようとした試みでもある²⁷⁾。つまり、それは「理想的発話状況」を近代ヨーロッパにおける市民的公共性の成立に伴う一定の状況として歴史的に限定したものという性格をもっているのである。ハバーマスは「理想的発話状況」を、コミュニケーション参加者が好むと好まざるとにかかわらず、必ず先取りして仮定せざるをえない「反事実的仮定」＝「超越論的仮象」であるとし、それが同時に未来のよき生活様式の予兆であるとした。ハバーマスにおいては、「理想的発話状況」は言語的コミュニケーションそのものに内在しつつ、社会関係の発展を規制するテロスである。これに対してグールドナーは、「よき議論の強制なき強制」を規範とする「批判的ディスコースの文化」が、それ自体一定の社会的・歴史的所産であり、一定の社会層によって担われ、その利害状況や日常経験に合致し

23) C. Disco (前掲論文) の表現。

24) "The Metaphoricity of Marxism and the Context-Freeing Grammar of Socialism," *Theory and Society* 1(4), 1974.

25) *The Dialectic of Ideology and Technology*, New York, Oxford University Press, 1976. 以下、『テクノロジーとイデオロギー』と略記。本書の概要については、矢沢「リフレクシヴ・ソシオロジーの可能性」(前掲論文)を参照。なお、グールドナーは1959年からワシントン大学にいたが、70年代にはアムステルダム大学教授を兼任するようになり、実際にはヨーロッパで活動することが多くなった。言語哲学、解釈学、批判理論に触れたのもオランダにおいてである。「ラディカル社会学」の退潮と、グールドナー一流の激しい口論のために、アメリカでの活動の余地が狭まったこともあるかもしれない。

26) *Ideology and Technology*, p. 39.

27) John O'Neil, Book Reviews, *American Journal of Sociology* 87(5), 1982, p. 1191.

た文化であることを強調する。その社会層とは、コミュニケーション革命や伝統的・宗教的権威の失墜という状況が生み出した近代の世俗的知識人である。「批判的ディスコースの文化」は、普遍主義的で非人格的な理論的討論を特権視することによって、伝統的権威を侵食し、ひとつの社会層としての近代知識人の社会権威を正当化するイデオロギーとして機能するのである²⁸⁾。

グールドナーによれば、「批判的ディスコース」は根本的な内的矛盾をかかえている²⁹⁾。「批判的ディスコース」を規制する規範としての近代合理性は、一方では批判による絶えざる自己審査を要求する。それは、「これまで所与として扱われてきたものを問題にし、ただ使われてきたものを反省にとりこみ、リソースをトピックに変換し、われわれの生活を批判的に審査する能力」、すなわち「思考について思考しうる能力」をたえず要請する³⁰⁾。しかし、他方では、近代合理性はディスコースが自己完結的であり、特定の社会的条件から自律的であることをも要求する。言説の「自己依拠性 (self-groundedness)」の規範は、議論が既存の社会的権威とは独立になされるべきことを義務づける点において、伝統的な権威に対してすぐれて批判的でありうることはいうまでもない。問題は、「自己依拠性」の規範への同調が近代合理性をしてみずからを超歴史的・超文化的なロゴスの化身として誤解させる点にある。そのとき、「批判的ディスコース」はそれ自身の依存する歴史的・社会的・文化的文脈について沈黙せざるをえなくなる。それは社会学者の存在を隠す社会学、マルキストの存在を隠すマルキシズムを生む。近代合理性のもつ「自己依拠性」の規範は「客観主義」を招来し、そのもうひとつの規範である「自己回帰的永久批判」と両立しがたくなる。「客観主義と客観主義批判とはともに近合理化性の文化の所産であり、その内的な矛盾の徴候」なのである³¹⁾。

『イデオロギーとテクノロジー』の序文におい

て、グールドナーは『危機』以降のみずからの知的軌跡を振り返りつつ、自己の立場の明確化を試みている。『危機』の主題がアカデミックな社会学の「脱神秘化」であったならば、その後の課題はマルキシズムの「脱神秘化」である。「わたしの立場は本質的には尾根づたいを走る者 (ridge rider) のそれであり、半分はソシオロジスト、半分はマルキストとして、その両方に反逆する」。既存の理論パラダイムの内部に入り込んで、その自己回帰性の欠如を衝くというグールドナーの方法は、本質的に破壊的・否定的なものであらざるをえない。それは、確立したパラダイムのもとでの経験的研究の蓄積というアカデミックな社会学の「生産性」に逆行するのみならず、理論の真理性への確信によって支えられるマルキシズムの政治的実践の「生産性」にも逆行する。だから、「リフレクシヴなマルクス主義者はリフレクシヴな社会学者同様、無法者 (outlaw) とされてしまうのである」。彼は、こうした立場を「ソクラテス的探求」(Socratic Inquiry) とよび、その特質を次のように規定している。「ソクラテスの学徒は、他を批判する権利を得るためにはみずから積極的な (positive) 教義の提出という身代金を払わねばならない、とは考えない。いかなる積極的な教義も説かないことによって、ソクラテスの徒はひとつの未審査の生活 (unexamined life) を別の未審査の生活と交換することを避け、それによって現在と反現在の双方をくつがえす³²⁾」。ここには自己回帰性を武器として、支配的な理論にとって「敵意ある情報 (hostile information)」, 「バッド・ニュース (bad news)」を告知する、偶像破壊者グールドナーの基本的な立場が宣告されていると思われる。

28) *Ideology and Technology*, pp. 62-63, 133-135.

29) グールドナーのいう「内的矛盾」とはあるシステムが二つの等しく核心的な規範をもっているとき、どちらか一方への同調が他方に対して必然的に逸脱となるようなダブルバインドの状況をさす。 *The Two Marxisms*, pp. 169-170 参照。

30) *Ideology and Technology*, p. 49.

31) *Ibid.*, p. 50.

32) *Ibid.*, pp. xiv-xvi.

五 「新しい階級」としての知識人

グールドナーの「新しい階級」論はすでに初期の産業社会学における「専門家」への積極的な期待に萌芽がみられたが、その後「福祉国家のテクノロジー」批判を経て、「批判的ディスコースの文化」の集合的な担い手としての知識人という視点

へと展開されてくる。だが、独自の利害と文化をもった階級としての知識人という、「知識人階級」論は「革命的知識人論序章」（1976）においてはじめてその輪郭をあらわす³³。グールドナーはここで「知識人とはただその演ずる〈言語ゲーム〉（ヴィトゲンシュタインのいう意味で）によってのみ、従ってひとつの言語階層（speech stratum）としてのみ厳密に概念化しうる」としたが、

33) “Prologue to a Theory of Revolutionary Intellectuals”, *Telos* 26 (Winter), 1975. 「革命的知識人論序章（上下）」と題して『思想』, 1977年3-4月号に訳出されている。これには誤訳が多い。以下にリストした箇所は重要な誤訳の例示である。他にも、グールドナーの議論を誤解させるような間違いが多いので、この機会に注意を喚起しておきたい。

(a)原文：“The breakdown of the feudal and old regime system of personalized patronage relations between specific members of the old hegemonic elite, and individual intellectuals or cultural producers” (p.14)

訳文：「私事化していた聖職授与権の封建的・アンシャンレジームの制度の崩壊が、かつて授与権を持っていた特別メンバーのエリートと一代限りの知識人や文化人との間を結びつけた」。(32頁)

この文章は、近代知識人が革命的な勢力として成熟してゆくときの条件の一つを記述した箇所であり、正しくは、「旧いエリートの特定のメンバーと個々の知識人や文化生産者との間を結んでいた人格的なパトロン関係という、封建的・アンシャンレジームの制度の崩壊」である。

(b)原文：“Intellectuals, then, may be at home almost anywhere. Or they may be homeless anywhere, feeling an alienation from all particularistic, history-bound places, and feeling separated from an everyday life unintelligible except to those sharing the same tacit background assumptions.” (p. 20)

訳文：「知識人にはあらゆる場所がわが家でありうると同時に、どんな場所もわが家でありえない。なぜなら、知識人は排他的な、歴史に縛られたどんな場所にも疎外を感じ、また、共通の前提を暗黙裏に共有する知識人間の生活は別として知性の欠如した日常生活にはそぐわない、と感ずるからである。(36頁)

ここは、特定の文脈にとらわれない「批判的ディスコース」を内面化した知識人が日常生活から疎外される経験を記述した箇所であるが、訳文は「また、・・・」以下が全くの間違いである。正しくは、「また、共通の前提を暗黙裏に共有する人々同士でないと理解できないような日常生活から引き離されている、と感ずるからである」であろう。

(c)原文：“One common view is that the revolutionary potential is invested only in the ‘intellectuals,’ but not in the technical intelligentsia. Without committing myself in the slightest to the crude thesis of a ‘managerial revolution,’ I do, however, also reject the equally vulgar, contrary thesis that sees the technical intelligentsia as mere social ‘agents,’ fully controlled by economic and political interests.” (p. 4, footnote 4)

訳文：「通説に従えば、革命を起こす潜在的能力は〈知識人〉のみにあって技術的インテリゲンチアにはないと考えられている。私も技術的インテリゲンチアを経済的政治的利害によって完全に統制された単なる社会的〈動因〉と考える命題に、賛成である。ただし〈周辺革命〉という未完の命題をその視野に入れてはいない」。(39頁、註4)

managerial revolutionの完全な誤訳であるばかりでなく、文意が逆転している。グールドナーは通説に異議を唱えているのであって、正しくは、「私自身は〈経営者革命〉という粗雑な議論に加担するつもりは全くない。とはいえ、技術的インテリゲンチアを経済的政治的利害によって完全に操られた社会的「代理人」にすぎないとする、同様に通俗的な見解も受け入れることはできない」の意味である。

その〈言語ゲーム〉とはまさに「洗練された言語種」を多用する「批判的ディスコース」のそれにならな³⁴。「いまや資産家であろうと権力者であろうと、誰もが間違っただけをいう可能性があり」、それらは批判されねばならない。したがって、「一定の規範体系あるいは文法が既成の階級制度や権力制度から部分的に分離されるようになり、ついには上級階級や権力エリートの行為に対してさえ、これを審判する権威と権利を主張するようになる³⁵」。しかし、知識人が既存の階級制度の審判者としてあらわれることは両義的な事態である。知識人は、一方では既存の経済エリート（資本家）や政治エリート（官僚エリート）を批判し、その権威をたえず剥奪してゆく点で現代における「解放理性の担い手」である。しかし、他方では、知識人の批判的文化は、「上手に話す方が下手に話すより良い」という価値前提に立ち、「知識、認識、反省、洞察による新しいヒエラルヒーを暗黙裏に開始する」のである³⁶。

『知識人の将来と新しい階級の台頭』（1979）において、グールドナーは「知識人論序章」での議論をさらに一般化して、「新しい階級」の台頭を世界史的な視野で捉えようと試みる³⁷。それは同時に、サン・シモンから T. ヴェブレン、A. パールと G. ミーンズ、J. パーナムを経て、J. ガルブレith に至るテクノクラシー論、I. クリストルや N. ボドレッツによる知識人の「反逆文化（adversary culture）」論、S. マレ、A. ゴルツらのネオ・マルキストの新中間層論、バクーニン、W. マハイスキーから M. ジラスに至る社会主義下の階級構造の考察、さらには P. ブルデュー文化資本や象徴的支配の理論などを吸収したものである。グールドナーによれば、高等教育を通じて拡大再生産される「批判的ディスコース文化」は、異なる専門分野や職業についている知識人に共通のアイデンティティをあたえる。その結果、大学、研究所、メディア、など知識の生産、流通、分配に関わる機関が、

「新しい階級」の形成のための制度的な基盤となる。また、知識人が所得や権力を求めるとき、その要求は「文化資本」としての知識の保持にもとづいている。文化資本の所有者はこれを「蓄積」することができ、経済的、政治的市場においてこれを「活用」することができる。したがって、「新しい階級」としての近代知識人は批判的ディスコースを共有する「言語共同体」であると同時に、文化資本を独占する「文化ブルジョアジー」でもある。

グールドナーによれば、現代においてもっとも重要な「階級闘争」は知識人をめぐるそれである。「新しい階級」は東欧社会主義下では古い党官僚エリートのヘゲモニーに、資本主義下では貨幣資本家（moneyed bourgeoisie）のヘゲモニーに挑戦しつつ台頭してくる。とくに1960年代以降のアメリカを中心にみた場合、この挑戦は、消費者保護運動、科学的経営の発展、政策決定における専門家やシンクタンクの介入、自律性をもった官僚機構の発展、エコロジー運動などに具体的にあらわれている、とされる³⁸。もっとも、知識人の台頭についてのグールドナーの予言は、レーガン長期政権に代表されるような80年代の保守主義の再生によって見事に裏切られることになった。だが、グールドナーの主張は、60年代から70年代にかけての反資本主義的な社会運動の担い手が労働者層や貧困層よりもむしろ学生や若い専門職層などの高学歴中間層であった事実を説明する試みとしての有効性を持っている。事実、『知識人の将来』は高学歴層ないし専門・管理者層の政治的動向に焦点をあてた先進社会分析の視角として、アメリカや北欧を中心に広く議論され、階級分析、社会階層論、政治社会学の実証的な研究に対して大きな影響をあたえた。インパクトの大きさという意味では、『知識人の将来』は『産業官僚制』、『危機』と並ぶ、グールドナーの代表作のひとつとみてよいだろう³⁹。

34) "Revolutionary Intellectuals," pp.18-21.

35) *Ibid.*, p.32.

36) *Ibid.*, pp.24-27.

37) *The Future of Intellectuals and the Rise of the New Class*, New York, Oxford University Press, 1979. 原田達訳『知の資本論—知識人の未来と新しい階級』新曜社1988。以下、『知識人の将来』と略記。

38) *The Future of Intellectuals*, pp.16-17.

39) 『知識人の将来』のインパクトは大きいので、ここでは文献をあげるにとどめ、これらを全体として評価する作業

「新しい階級」論はまた、グールドナーによる自己回帰性プロジェクトのいわば論理内在的な帰結でもある。彼は新しい階級としての知識人を「欠陥のある普遍的階級 (the flawed universal class)」と規定する。知識人は科学技術の担い手であるのみならず、エコロジーにも敏感であり、検閲に反対して公共的討論による政治決定にコミットしている点で、社会全体の利害を代表する「普遍的階級」であり、「現代社会におけるもっとも革新的な勢力」である。しかし、新しい階級の台頭は同時に新しい形の支配のはじまりでもある。知識人もまた文化資本の独占というパティキュラーな利害をもっており、それは「真理の独占」を通して「知る者—知らざる者」の間に新たなヒエラルヒー構造を生み出す。したがって、知識人の「普遍性」には「ひどく欠陥がある (badly flawed)」のである。すでにあきらかなように、「新しい階級」に対するグールドナーのアンビヴァレントな姿勢は、「批判的ディスコース」に対する彼のアンビヴァレンスをそのままひきついでいる。そこには、「良き議論のもつ強制なき強制」にもとづく参加民主主義のユートピアと、「真理」の独占にもとづくオーウェル的な管理社会という反ユートピアが等しく内在していたのである。

グールドナーの微妙な立場は、ハバーマスの議論と比較するとより理解しやすいだろう。すでにみたように、彼のいう「批判的ディスコース」は

あきらかにハバーマスの「理想的発話状況」と重なっている。しかし、後者が言語的コミュニケーションに内在する「超越的仮象」であり、言語使用に内在する超歴史的なテロスであるのに対して、前者は「近代合理性の文法」という歴史的に限定された規範である。ハバーマスの場合、「理想的発話状況」は未来の「よき生活形態」の先取りでもあるわけだが、その担い手はあくまでも言語的コミュニケーションそのものであって、特定の社会層ではない。あえていえば、システムによる「生活世界の植民地化」を阻止し、生活世界固有の合理化の推進に利害関心をもつ人々すべてが「変革主体」であるが、その輪郭は曖昧である。他方、グールドナーの「批判的ディスコース」には啓蒙的近代知識人という明確な社会的な担い手がある。しかし、そうすると、この現実の社会層のもつ物質的、観念的な利害の問題が無視できなくなり、かえってそうした主体に担われる言説規範そのものの存在被拘束性が問題にされてくるのである。「批判的ディスコースの文化」は「理性的社会 (rational society)」の先取りではあるが、必ずしも「良き社会 (good society)」の先取りではない。

実際、『知識人の将来』では、ほとんどあらゆる社会「理論」が「新しい階級」のイデオロギーとして描かれている⁴⁰。古典的マルキシズムをはじめ、エコロジー、システム理論、さらにはパーソ

は別稿に譲りたい。本格的な理論的批判としては前掲の Theory and society の追悼特集の他、グールドナーの知識人論をテーマにした R. Eyerman et al (eds.), *Intellectuals, Universities and the State*, Berkeley, University of California Press, 1987 所収の諸論文が重要である。グールドナーの「新しい階級」論を60年代から70年代のアメリカを中心とした「(高学歴) 中間層ラディカリズム」の説明仮説として実証的分析にかけたものに以下のような研究がある。これらの実証研究は総じてグールドナーの視点の有効性を認めながらも、「新しい階級」の台頭は主に70年代までのエピソードであり、80年代以降の先進諸国の政治状況にはあてはまらないとしている。Steven Brint, "New Class and Cumulative Trend Explanations of the Liberal Political Attitudes of Professionals," *American Journal of Sociology* 90(1), 1984. Robert Wuthnow and Wesley Schrum, "Knowledge Workers as a New Class," *Work and Occupations* 10(4), 1983. Ronald Inglehart, "Post-Materialism in the Environment of Insecurity," *American Political Science Review* 75, 1981. Cyril Levitt, *Children of Privilege: Student Revolts in the Sixties*, Toronto, University of Toronto Press, 1984. 拙論「アメリカ知識層の変貌」(久保芳和編『アメリカー夢と現実』啓文社, 1987所収) また、グールドナーのニュークラス論に鼓舞されて、アフターマティヴ・アクション批判を展開している F. R. Lynch のような例もある。F. R. Lynch, "Affirmative Action, the Media, and the Public: A Look at a 'Look-Away' Issue," *American Behavioral Scientist* 28 (6), 1985. なお、Jean L. Cohen, *Class and Civil Society*, Amherst, University of Massachusetts Press, 1982, pp. 15-17 にグールドナーのニュークラス論に対する簡潔だが鋭い批判がみられる。さらに、東欧社会主義における「知識人階級」の台頭を捉えた G. コンラッド・I. セレニイ (船橋・宮原・田仲訳) 『知識人と権力』新曜社, 1986 参照。

40) *The Future of Intellectuals*, pp. 83-84. グールドナーの議論は、いわゆる「知識社会」論とは一線を画している。科学技術の機能的な重要性は新しい階級の台頭にとって必要条件ではあるが十分条件ではない。「文化資本」と

ンズ社会学やハバーマスの批判理論までが、それぞれニュアンスを異にしながらも、知識人階級の利害状況と「選択的親和性」をもつ観念体系として言及されている。たとえば、パーソンズがビジネスとプロフェッションの収れんを強調して、新しい階級と資本家階級との合流を志向するのに対して、ハバーマスは「新しい階級のエリート主義的傾向に対して批判的感性性をもち」つつも、伝統的な人文系知識人の立場にたつて資本家やテクノクラートを批判し、社会的目標そのものが討論を通じて合理的に選択されるような制度的枠組を追求する。それは「道徳性と理性の守護者 (the Guardian of morality and reason)」としての知識人を新しいエリートとして認定する側面を持っている。こうして、ハバーマス理論は新しい階級の内部分裂の契機、さらにはその自己批判の契機を含みながら、微妙な形でこの階級のイデオロギーとして捉えられることになる⁴¹⁾。

もちろん、グールドナーのねらいはパーソンズやハバーマスの理論を知識人イデオロギーに還元することではない。彼が強調するのは、あらゆる「理論」は、それがどのような社会的集団（階級、階層、職業、性、人種、年齢などを含む）の利害状況を反映しているにせよ、同時に「理論家」としての「知識人」の利害状況をも必然的に反映する、という点である。グールドナーのいう「理論の理論」とは、「理論」の裏に隠れて見えない「理論家＝知識人」の存在を明るみに出す試みであった。彼の機能主義批判やマルキシズム批判は、近代合理性のもつロゴス中心主義の生み出す「理論」一般に対する批判的理論に至ったといえるのである。

ここまでくれば、理論の自己回帰性の追究において、「マルキシズムのマルキシズム」の視点がいかに決定的な重要性をもっていたか、が自ずから明らかになるであろう。グールドナーにとってマルキシズムは「理論のなかの理論」であり、「偶像のなかの偶像」であった。というのは、マルキシズムは認識の階級的制約性を指摘したことで、理論の自足性の限界を洞察し、その限りで「自己回帰的な」性格をもった理論だからである。しかし、そのようなマルキシズム理論でさえ、十分なリフレキシビティをもっていない。このことはひとたびマルキシズム自体をマルキシズムの立場から分析しようとするとき明らかになる。「階級闘争に関するマルキシズムのシナリオはついに自分自身を、つまりこのシナリオを書いた者、マルクスとエンゲルスを説明することができなかった。この階級闘争の理論家達は、プロレタリアートと資本家階級の亀裂の間のどこにいるのだろうか。この疑問に対してはただ沈黙でごまかした当惑があるのみである。(テレビ視聴者にむかって「カメラマンはどこにいるのか」とは聞かないものとされている⁴²⁾)」。マルキシズムは「人間の意識がその存在を規定するのではなくて、逆に、人間の社会的存在がその意識を規定する」という優れた洞察をマルキシズムそのものに適用することができない。レーニンが科学的社会主義をインテリゲンチアによる思想発展の「自然で必然的な所産」としたが、グールドナーはこれをマルクス理論の非マルキスト的説明、したがってその自己回帰性の欠如の露呈、としてとらえたのである。

「人間資本」の問題にかかわるグールドナーの用語上の混乱については Bill Martin and Ivan Szelenyi, "Beyond Cultural Capital: Toward a Theory of Symbolic Domination" (R. Eyerman et al 前掲書所収) 参照。

41) Ibid., p. 39. グールドナーの影響下で、ハバーマスを「新しい階級」のイデオログとして分析したものに、Cornelis Disco, "Critical Theory as Ideology of the New Class," *Theory and Society* 8, 1979 がある。しかし、グールドナー自身の立場はより微妙であって、むしろハバーマスを「新しい階級」の危険を避けようとする批判理論家として評価している。たとえば、*Against Fragmentation*, p. 158 をみよ。Konrad & Szelenyi もあらゆる社会理論に知識人イデオロギーの遍在をみる点で同様である。なお、グールドナーがハバーマスを非政治的、フェビアン的と批判したという見方があるが、グールドナーはそうした見方こそ「政治」をわい少化する立場からの批判であって、ハバーマスは「エンカウンター・グループ」流の意識変革という政治的实践を示唆しているとみていた。ハバーマスの難点はむしろ「公共性の崩壊」の旗印のもので、選挙代表性による議会制や自由なメディアがそれなりに機能している西側先進国（リベラリズム）とこれらを欠くソ連型社会（権威主義）との根本的な差異を曖昧にしてしまうことにある。矢沢修次郎「リフレクシヴ・ソシオロジーの可能性」（前掲論文）。Ideology and Technology, pp. 162-163.

42) *The Future of Intellectuals*, p. 9.

六 理論のポリティカル・エコノミー

官僚制化の必然性の命題や価値自由信仰の問題にはじまり、「新しい階級」論に至るグールドナーの狙いは一貫して「マルキシズムであれ何であれ、〈理論〉というものは、世界について何かを主張する一連の命題という以上のはるかにおおくのものに關係している」ことを示すことであった⁴³。それは、「カメラマンはどこにはいるのか（“Where does the cameraman fit in?”）」という問いに集約される、理論の背後に隠れた理論家の問題に対する執拗な追究の軌跡であった。社会理論は社会的世界に関する真理命題であるとともに、社会理論家による政治的实践であり、組織上の地位を獲得し運動のための資源を動員するための戦略的行為でもある。したがって、「批判的ディスコース」の旗印のもとで、独自の利害を追求する戦略的な行為者として知識人を想定することは、グールドナーの自己回帰性のプロジェクトにとって不可避の要請だったといえる。そして、彼がこの問題をいかに執拗に追求したかは、『二つのマルキシズム—理論の発展における矛盾とアノマリー』（1980）と『断片化に抗して—マルキシズムの起源と知識人の社会学』において確認することができる⁴⁴。

『二つのマルキシズム』は、『社会学のために』（1973）所収の同じタイトルの論文を発展させたものである。二つのマルキシズムとは、主意主義、主観性、政治的行動、方法的全体主義に傾く「批判的マルキシズム」と、決定論、客観主義、政治的静寂主義（political quietism）、方法的還元主義に傾く「科学的マルキシズム」である。グール

ドナーは、マルクス、エンゲルスのテキストにこれら二つの思想がともに内在していること、そして、それらは相互に矛盾する思想であること、を示そうとする。世界の至るところに矛盾が存在することを洞察したマルキシズムは、それ自身のなかにも矛盾が存在するのを見抜かなければならない、というのが彼の主張であって、ここでも理論の自己回帰的批判の原理が貫徹されていることに留意する必要がある⁴⁵。

また、『二つのマルキシズム』で注目に値する議論として、理論の「通常化（normalization）」の陥せいの指摘がある。「通常化」とは T.クーンの意味での「通常科学」において、アノマリーをみつけた科学者のとる行動である。「通常科学」の枠内で活動する科学者は、アノマリーを発見したときパラダイム自体の妥当性を疑うことはせず、むしろその適用の仕方を問題にする。パラダイムが問題なのではなく、自分の適用能力に問題があるとするのである。これはすでに『危機』において対象の善性（goodness）と効果性（potency）を一致させようとする傾向として指摘されていたが、より広くは矛盾、分裂、変則といった不協和を暗黙のうちに否定しておいて、もっぱらこれらの不協和の解消に努める傾向といっていよう。マルキシズム理論の内的矛盾の場合、「若きマルクス」と「成年マルクス」、あるいは、「マルクス」と「エンゲルス」の恣意的な分離がその例となる。マルクス理論の望ましい側面を「マルクス」に、排除したい側面を「エンゲルス」に割り当てて問題解決を計るのは、それ自身に矛盾をはらむ理論を「正常化」して、その統一性を救出しようとする試みに他ならない。また、そうしたやり方は、二人が「批判理論家の共同体」をなし

43) Eyerman et al (eds.),前掲書, p. 7.

44) *The Two Marxisms*, New York, Oxford University Press, 1980. 以下、『二つのマルキシズム』と略記。*Against Fragmentation: The Origins of Marxism and the Sociology of Intellectuals*, New York Oxford University Press, 1985. 以下、『断片化』と略記。『二つのマルキシズム』は『イデオロギーとテクノロジー』『知識人の将来』とともに三部作『弁証法の暗黒面』の一部をなしているが、それは同時にマルキシズムに関する新たな四部作のはじまりとして位置づけられていた。グールドナーの計画では、この四部作は、それぞれ(i)マルクス、エンゲルス生存中の理論発展とその内的矛盾(ii)レーニン、スターリン、トロツキー、ルカーチ、グラムシ、アルチュセールらの20世紀マルキシズムの問題(iii)マルキシズムの社会的歴史的源泉、その階級的基盤の問題、およびその技術的源泉と理論的創造性の問題(iv)マルクス理論の合理性とその限界、を扱うものとされていた。このうち(i)が『二つのマルキシズム』として完成されたが、残りの計画は実現されるに至らなかった。『断片化』は、グールドナーが1980年12月に急死するまでに完成していた草稿を編集して出版したもので、このうちの(ii)と(iv)についてある程度まとまった研究を含んでいる。

45) もっとも、「批判—科学」の軸のみでマルキシズムの類型化を試みるのは無理がある。M. Jay の前掲論文を参照。

ていた事実を軽視するのみならず、本来集合的な産物である思想やテキストがひとりの作者の頭の中から生まれるとする、ブルジョア的な「文学的財産 (literary property)」の観念に立脚している、と批判する。ここでのゲールドナーの議論は「作者」概念の脱構築の試みといってよく、この点で「作者とは何か」における M. フーコーの立場との親近性が注目に値する⁴⁶⁾。

『断片化』で新たに定式化された理論分析の視点に「理論のポリティカル・エコノミー」のそれがある。どのような理論にも信奉者、敵対者、競争者の集団があり、政党、社会運動、大学などの組織上の地位をめぐる指導権争いが繰りひろげられるが、それが同時に理論の性格に深く刻印される。「理論を性格づけるのは、調査や事実や論理のみではない。理論のアイデンティティはまた知的生活の政治や政治経済によっても形づくられる⁴⁷⁾」。ゲールドナーによれば、とくに重要なのは競争者である。競争者の理論は自己の理論と「同一の社会的空間を占め、類似の社会的、知的機能を果たし、同一の社会集団の支持を得ようとする」。競争者からの挑戦を受けた理論は、多くを共有しているにもかかわらず、もっぱら境界線の設定に力をそそぎ、その共有部分を抑圧する傾向がある。ゲールドナーは、こうした理論形成の政治的側面をまざまざと示す事例として、生成期のマルクス理論が初期社会主義運動の指導権をめぐるたえず直面した、ヴァイトリングからバクーニンに至る反インテリ異論派からの挑戦に注目する。この対立は、資本主義的工業生産の発展によって没落の危機に瀕していたアーティザンと市場経済や国家官僚制の未発達のために過剰になっ

ていた知識人との間の、労働運動をめぐる指導権争いという性格をもっていた。職人達は、ライフスタイルにおいてプロレタリアートに近く、また生産現場での組織力をもっていたから、科学的理論によって労働者階級を導こうとする社会主義知識人にとってもっとも脅威的な存在であった。ゲールドナーによれば、共産主義者同盟におけるマルクスとヴァイトリング、「第一インター」におけるマルクスとバクーニンの対立は、教義上の対立と運動組織の指導権をめぐる競争との同時的な相互作用として理解できる。たとえば、代議員を肉体労働者に限定しようとする主張は、「労働者のみが労働者を理解する」という教義に則っているが、それは同時に職人勢力が知識人を占めだそうとする戦略でもある。また、マルクスがこの「インサイダー特権論」(職人であれ、少数者集団であれ、女性であれ!)を否定するのも、理論的な見解の相違であるとともに戦略上の要請でもある。ゲールドナーが問題にするのは、こうした「理論」の「知的妥当性」ではなくて「社会的機能」なのである⁴⁸⁾。ここでの彼の視点は、さきの「作者」概念の批判同様、フーコーの「知/権力」を想起させるものがある。ある理論をとりあげるときに、「それが真理であるか虚偽であるか」という問い方はせず、むしろ「それが真理とされることでどのような権力効果が生じるか」を問う、フーコーの「真理の体制」論との親近性である。

『断片化』においても一つ無視できないのが、知的創造性の理論の展開である。これはすでに「知識人論序章」で「知識人」と「インテリゲンチア」の区別に際して提出されていたが、ここではマルクスの「天才」の秘密を探ることで、知的創

46) *Against Fragmentation*, pp. 250-286. M. Foucault, "What is an Author?" in *Language, Counter-Memory, Practice: Selected Essays and Interviews*, Ithaca, Cornell University Press, 1976. また、こうした視点のもたらした予期せぬ結果として、エンゲルスの復権が示唆されているのも興味深い。たとえば、エンゲルスによる「われわれ人間の自然に対する勝利にあまり得意になりすぎないようにしよう。そうした勝利の度に、自然はわれわれに復讐するからである・・・」という一節を引きつつ、人間による自然の征服というプロメテウスの「人間主義的帝国主義」の傾向の強いマルクスに比べて、エンゲルスがより「エコロジカルな感受性」を示していることを評価する。また、エンゲルスが、社会主義のもとでも、近代的生産技術そのものが資本主義以上に厳しい労働規律と専制的管理を不可避的に要請する、と書いたのは有名であるが、ゲールドナーはここに技術決定論をみるだけでなく、むしろマルクスに欠けているテクノロジー疎外の問題への冷徹な洞察をみるのである。

47) *Against Fragmentation*, p. 89

48) *ibid.*, p. 139. マルクスの〈プチ・ブル〉に対する嫌悪と軽蔑も、反インテリの職人勢力との権力闘争ぬきには理解できない。また、バクーニンとの対立がとくに激しかったのも、ヴァイトリングとは異なりバクーニン自身が自他ともに認める知識人であり、なおかつ職人のインテリ排除戦略を助長しうる理論を提供したことで、マルクスにとって二重の競争者だったからである。

造性一般の説明を試みている。グールドナーは、アルチュセールの「認識論的切断」の議論が、アンチ・ヒューマニストらしからぬ「天才」崇拜のロマンティズムに通じると批判する⁴⁹。この点ではむしろレーニンがイギリスの政治経済学、フランスの空想的社会主義、ドイツの観念論哲学という、マルクス理論の源泉の多重性 (multiplicity) に着目したのは当を得ていた。マルクスの独創性は、これら複数のパラダイムがマルクス個人の中で相互に対決し合流したことに由来する。たとえば、「生産力」の概念は通常経済学のなかに位置づけられているが、マルクスの場合にはヘーゲル的な意味での「世界精神」が読み込まれていて、歴史発展の原動力としての意味を帯びてくる。ドイツ哲学の素養のゆえに、関心がイギリス経済学に移行しても、それに飲み込まれてしまうことなく、むしろ経済学の外から経済学的概念を独自に規定することが可能になるわけである。マルクスの独創性は、「言語的境界侵犯」という「知的逸脱」の能力に存するのであり、それは「これまで一つの言語でしか見えなかったものを、まだそれを見るためには使われたことのない、もう一つの言語を使って見る」ことを可能にする⁵⁰。そして、それが単なる折衷におわらないためには、複数の理論言語の間に順序づけが不可欠である。マルクスの場合には、ヘーゲル哲学が重心の役目を果している。一般に、哲学の素養がある場合に理論的な革新が生まれやすいのは、哲学の抽象水準の高さが他のより具体的な言語を翻訳するのを容易にするからである。

もっとも、「認識論的切断」をめぐるグールドナーのアルチュセール批判は、内容的には的はずれであるかもしれない。アルチュセールはまさにヘーゲル的な主体＝歴史の目的論から離脱した点にマルクスの天才を見いだしているのだから、この問題を抜きにして「認識論的切断」を議論して

も実質的な批判にはならない。しかし、他方で、「境界侵犯」の考え方がマルクスも含めて、独創的な理論を生み出すメカニズムの一面を捉えるきわめて強力な議論であることはあきらかであろう。それは「理論とは何か」を執拗に問い続けたグールドナーの探求のもたらした重要な成果のひとつといえる⁵¹。

最後に、『断片化』がマルキシズム理論にたいしてきわめてアンビヴァレントな態度を示していることを確認しておく必要がある。L. コーザーによれば、「マルクスの遺産に対するグールドナーのアンビヴァレントな姿勢は、本書の前半の200頁でマルクスが労働者階級ではなく疎外された知識人の新しい階級の利益に奉仕するイデオロギーをつくりあげたことを証明しようとするが、残りの100頁ではマルクスの並はずれた天才を説明するためにさざげられているのをみればあきらかである⁵²」。それは、マルキシズムのみならず近代の社会理論一般にあてはまる。グールドナーが、「近代合理性の文法」としての「批判的ディスコースの文化」、さらには近代理性のロゴス中心主義にたいしてきわめてアンビヴァレントな態度をとっていることはすでに指摘した。このことは「新しい階級」のかかえる矛盾として、また彼のハバーマス評価の動揺としてもあらわれた⁵³。いずれにしても、グールドナーのプロジェクトは近代理性によって近代理性を批判するという理論の自己回帰的批判の徹底であった。それは、彼自身気づいていたように、影踏みにも似た不可能な作業であり、結局のところ彼はこの連鎖から抜け出れなかったというべきかもしれない⁵⁴。グールドナーは自己の方法を「陰鬱な弁証法 (dark dialectic)」と呼んだが、M. ジェイによればそれは、ルカーチ流の主観／客観の弁証法において総合が否定されている方法である⁵⁵。彼はこうした徹底的に否定的な作業を通じて、理論という偶像を破壊し、対

50) *ibid.*, p. 204.

51) 後期グールドナーをあまり高く評価しなかったコーザーも知的独創性に関する議論は絶賛している。L. Coser, "Gouldner's Struggle with the Ghost of Marx", *Contemporary Sociology* 15(1), 1986.

52) *ibid.*, p. 37.

53) *Against Fragmentation*, p. 158. ここではハバーマスは「新しい階級」のイデオログではなく、むしろその批判者として評価されている。

54) グールドナーの提示した解決策は、同時に複数の言語や理論に精通することで、特定の言語や理論をそのつど対象化することであった。 *Ideology and Technology*, pp. 52-53.

55) "The Dark Side of the Dialectic", *Sociological Inquiry* 46(1), 1976. M. Jay, 前掲論文, p. 768.

象世界から自律しそれ自体で自足した社会理論という観念がもはやナイーブとなりつつある今日の状況を用意したといえるだろう。

七 グールドナー像の再考

グールドナーの仕事の中に欠陥を見つけ出して批判するのはたやすい。実際、彼には、他者の批判に性急なあまりの勇足的な発言が多く、「架空の敵にむかって突進するドン・キホーテ」にたとえられるのうなづける一面がある。たとえば、『危機』におけるパーソンズ批判の一部、『二つのマルキシズム』におけるP.アンダーソン批判、あるいは『断片化』におけるアルチュセール批判などに不用意な議論が目だつ。その他にも、個々の議論において、これは言い過ぎではないかと思わせる箇所がかなりある。グールドナーは、『プラトン』以降つねに「未完成の橋の先端から向こう岸めざして跳ぼう」としたのだが、彼自身も気づいていたように、しばしば目測を誤るはめに陥った。一部の人々にとって、彼の自己撞着的な攻撃性向が、理論家として致命的な欠陥とみなされたとしても不思議ではない。

だが、他方では、このような「跳躍」の試みが終始一貫した問題意識に裏づけられていたことは見逃がされてはならないだろう。マートン門下の組織研究者から社会学のアウトロー、さらにはマルキシズムのアウトローへと歩んだグールドナーの軌跡は、それ自体きわめて特異な「知的逸脱」の軌跡であるが、それは彼の問題意識からしていれば必然的な逸脱でもあった。本稿があきらかにしようとしてきたのは、まさに度重なる「跳躍」が描いた「知的逸脱」の軌跡の底に貫通しているグールドナーの根本的な問題意識のであった。それは一言でいえば、「思考について思考する」というリフレクシヴィティ＝自己回帰性の問題である。初期の産業社会学、中期の機能主義研究さらには後期のマルキシズム研究を通じて、彼が執拗に追究したのは、社会理論とはつねに命題の論理的整合性や経験的妥当性以上の何かであり、それ自体がひとつの社会的実践としてその対象とする社会現象の一部である、という確信であった。理論の自己回帰能力とは、理論が理論自身をみづか

らの対象として考慮にいれることのできる能力に他ならない。理論の自己回帰性に固執することは、同時に理論の裏に隠れた理論家の存在に照明をあて、理論家＝知識人による言説の政治経済を分析することである。グールドナーの自己回帰性のプロジェクトは、すでに初期の官僚制研究や機能主義批判のなかに予告され、その後の、「社会学の社会学」、「マルキシズムのマルキシズム」の試みを経て、「新しい階級」論や「理論のポリティカル・エコノミー」、さらには知的創造性の理論という形で展開されていった。

グールドナーの自己回帰性プロジェクトには重大な限界があるのも事実である。それは「理論の理論」に内在する自己言及のパラドクスの中に足を踏み込んだまま、「言語は言語を批判的に対象化しうるか」という影踏みのような悪循環あるいは無限の自己回帰に陥ってしまった。グールドナーの場合、自己回帰性を欠き自足性を装う理論言語は近代合理性の文法を体現するのであるが、後者は同時にそれを批判する「永久批判」の契機をも含んでいる。近代合理性は「自己依拠性」（発話の正当性の根拠を神、伝統、既存の社会的権威にもとめない）と「永久批判」（現存するものすべての批判）という二つの矛盾した規範を含むとされ、理論の自己回帰的批判とは近代的理性の自己矛盾の表現そのものとなる。グールドナーが「批判的ディスコースの文化」の社会的な担い手である知識人（新しい階級）の中に〈解放理性〉と〈抑圧理性〉の同時並存をみとめ、それに対するコミットメントと批判の間で揺れつづけたのも、また、ハバーマス理論の意義に対する評価の揺れも、この矛盾の表出以外のなにものでもないといえるのである。

グールドナーは、「初期啓蒙の精神」と評されるが、より適切には啓蒙的批判精神をも批判する啓蒙的批判精神であったといえよう。彼は、啓蒙理性に深くコミットし、それに忠実であらうとしたがために、かえって近代理性のオート・クリティークに至ったといえる。グールドナーの仕事は近代理性の自己破壊の論理そのものを体現した一面を持っていたともいえるのである。この点で、彼の仕事を、ハバーマスとフーコーとの狭間に位置づけることも可能であろう。すでに指摘し

てきたように、グールドナーは啓蒙理性へのコミットメントをハバーマスと共有し、「批判的ディスコース」という形で〈理想的発話〉の解放的含意を摂取した。が、それはハバーマスのように理想的発話状況を言語コミュニケーションに内在する歴史貫通的、普遍的なテロスとして捉えるのではなく、むしろ近代市民社会の成立に伴う公共的討論の歴史的形態として把握するものであった。したがって、批判的ディスコースの文化はいかに普遍的な契機を含んでいようと、同時に特定の階層（近代知識人＝新しい階級）に担われたイデオロギーとしての契機をも含んでいる。ハバーマスが啓蒙を〈未完のプロジェクト〉と位置づけて、啓蒙的合理主義の一面の実現を批判しつつその全面的開花を目指し、批判理論の言語哲学的、語用論的な根拠づけを試みて一定の成果をあげたのに対し、グールドナーは啓蒙的合理主義に対する自己矛盾的な評価を持ち続け、それを近代理性の抱えた矛盾、さらにはその担い手である知識人＝新しい階級の抱える矛盾として記述するにとどまったのである。

他方、グールドナーの理論研究は〈作者〉概念の脱構築や「権力としての知」という視点において、フーコーの仕事と接点をもっていることはすでに指摘した。彼の「理論の理論」の到達点は、社会に関する理論的言説が、対象についての技術的な命題であるとともに、権力をめぐる理論家の戦略でもあるから、社会理論の考察にはその知的妥当性だけでなく、社会的機能に注目する必要があるという考え方である。これは、マルキシズムをはじめとする人文科学の知について、それが「真理」であるかどうかという問い方を避け、むしろそれが「真理」とされた場合の権力効果を問うという、フーコーの「真理の体制」の考え方に接近している。また、フーコーの知／権力の視点に示唆されている知識人像も、知を追求することが同時に権力の追求でもあるようなグールドナーの〈新しい階級〉と接点をもつことはあきらかである⁵⁶。とはいえ、古典的なイデオロギー論から離脱

したフーコーと比べると、グールドナーはいまだにイデオロギー論の構図にとどまっている。グールドナーの「理論の理論」は、マンハイムの存在拘束性の理論のラディカル化として理解できるのであり、そこでは社会諸階層の利害のみならず知識人＝理論家の利害が「真の認識を歪める」要因として考慮され、知識人の「自由浮動性」が否定される。その結果、フーコーに似てほとんどあらゆる知には権力の戦略が浸透することになるが、同時に、このような知はあくまでも「虚偽意識」と考えられており、その意味で伝統的な認識論の枠内にとどまっている。

グールドナーの自己回帰性のプロジェクトは、一方では啓蒙の全面的な開花を目指すハバーマス、他方では啓蒙的な知からの脱出をめざすフーコーとの狭間にあってやや影の薄い存在ではあった。それは結局のところ自己言及の袋小路に落ち込んでしまい、社会認識の新たな地平を切り拓くにはネガティブに過ぎた。しかし、だからといって彼の仕事が無意味になるわけではない。彼は自分の試みが「手を自分の首に巻き、どれほど締めることができるかを確かめ」ようとするような不条理なものであることを熟知していた⁵⁷。グールドナーのプロジェクトは近代理性に深くコミットすることによって、かえってその矛盾の中に巻き込まれ、「自己否定の不可能性」を壮大なスケールで示した希有なケースである。それは今後の社会学理論の展開において考慮しなければならない貴重な道しるべとしての意義をもっているといえよう。いずれにしろ、従来グールドナーといえば、『官僚制』、『機能的自律性と互酬性』、『危機』の評価を中心としたやや分裂した印象や、『危機』におけるパーソンズ批判を中心にした道徳的ラディカル印象が強く、それが後期の著作を含めたグールドナーの全体像の考察にとって障害になってきた。本稿では、グールドナーの知的軌跡を作品史的に追跡しつつ、そこに理論の自己回帰性の問題に対する一貫した追究が展開されていることを示そうと試みた。ハバーマスやフーコーとの関係で

56) Charles Lemert and Garth Gillan, *Michel Foucault: Social Theory and Transgression*, New York, Columbia University Press, 1982, pp. 117-118. グールドナーの著書には巻頭にニーチェからの引用句を掲げているものが多い。実際、彼のイコノクラズムはニーチェと一脈通ずるところがある。フーコーとの関係も含めて、検討に値する問題である。

57) 『知識人の未来』（訳書）131頁。

ゲールドナーをどのように評価しうるかは今後の課題ではある。が、いずれにしろ、ゲールドナーの適切な位置づけは、組織論、パーソンズ機能主

義批判, マルキシズム批判, 知識人論に通底する, 彼の批判的議論の質に注目してはじめて可能になるということを確認しておきたい。